SEGURASUL
南米安田保険

日伯毎日新聞
DIARIO NIPPAK

EXEMPLAR DE ASSINANTE
VENDA PROIBIDA

発行所：日伯毎日新聞社
ブラジル国サンパウロ市
グロリア街、322
電話＝278-3977
購読料：半ヵ年 CR$ 4.500,00
〃 1ヵ年 CR$ 8.000,00

旅行のすべては
pan andes TURISMO LTDA
R. GALVÃO BUENO, 57 - 2º ANDAR - TEL.: 270-7944

CIRCULAÇÃO DIÁRIA　Nº 11094　SÃO PAULO, QUINTA-FEIRA, 19 DE AGOSTO DE 1993　Jorn. Responsável: Issao Nishi – MT 6519　CR$ 40,00

練習艦隊、サントスに入港

ブラジルとの親善を
初級幹部の訓練かねて

五味海佳海将補を司令官とする平成五年度海上自衛隊練習艦隊が十八日午前八時、霧雨の降る中、サントスに入港した。日の丸の小旗を手にした百名ほどの日系人が、四年ぶり七回目の練習艦隊の来伯を出迎えた。

温い歓迎に感謝
五味司令官

サントス港での入港歓迎行事として、まず午前九時三十分から練習艦「かとり」の艦上で、田中在サンパウロ総領事来訪（表敬礼）が吹奏楽団の演奏とともに行われた。

その後、午前十時よりサントス日本人会の女性から花束の贈呈があり、五味海佳司令官、中上修司首席幕僚、伊藤元弘「かとり」艦長、八木場紀元「いそゆき」艦長、辻一敏「はまゆき」艦長がそれぞれ受け取った。また上新サントス日本人会会長、ダビド・カピストラーノ・ダ・コスタ・フイリョ・サントス市長が「一日千秋の想いでお待ちしておりました。一人一人が日本の代表として世界に貢献していくことを希望します。固い友情ではありますが、ブラジルの風物を十分に楽しんで下さい」といった内容のあいさつを述べた。

これに対して、五味海佳司令官が「日本人のブラジル移住が始まって今年で八十五年目を迎え、日伯両国の交流が深まりつつあることに大きな喜びを感じます。この遠洋練習航海は、初級幹部のシーマンシップ及びリーダーシップを育成するとともに、訪問国と日本との親善を深めることを目的としています。六月十六日に横須賀を出港してから、それぞれ土地で温かく歓迎していただき、本当に感謝しております」と述べた。

入港歓迎行事が終る頃には天候も回復し、強い日差しがふり注ぐようになっていた。大きな海軍旗を手に出迎えに来ていた柳谷長寿さん（六〇）は、「日本の軍艦を見てとても懐しい。自分は戦時中に日本にいたが、敗戦にもかかわらず、がんばっている姿はとてもいい」と語っていた。

また、足が不自由なため、隊員におんぶしてもらいながら艦内を見学した星野良江さん（八十）は、「ブラジルに来て初めて日本の船を見た。本当に嬉しい。来てよかった」と語ってくれた。

スザノ市のイッペランジャ老人ホームからバスでかけつけた森下妙子さんは「普段、山の中に住んでいるから変ったものを見たかった。日本に是非行ってみたいと思いました」と述べた。

練習艦隊の一行は半舷上陸で、十九日と二十日サンパウロ入りし、総領事館、歓迎委員会（山内淳委員長）、各県人会が主催する行事に参加し、二十二日午前九時、サントス港を出港する。

あいさつする五味司令官

サントス入港は予定どおり。練習艦「かとり」を繋留する艦隊々員。制服が真っ白

『エメボイ実習場史』
残部発見、販売へ

増田委一さんの労作「エメボイ実習場史」の残部が、このほど、故田草川兵馬さん宅で見つかり高野書店で販売されることになった。約五十部ある。値段は十ドル相当のクルゼイロ・レアル。

この本は、ブラジルにおける「学生移民」について書かれた本だが、とりもなおさず、日本移民史である。題は固い感じだが、文は平易で、読む人が放したくなくなるほどひきつける。

日本の作家故田宮虎彦氏の書評（増田さんへの手紙）一部抜すいすると、

「私はあれだけの結束力がありながら、なぜ五～六年間でエメボイが消滅したのか、不思議に思いながら、深く考えてみることをしませんでしたが、御著（エメボイ実習場史）でそれがわかりました。満州事変以後の日本政府の無謀な国策の転換がエメボイを見殺しにし、しかも、それに対して、何らの対策もとらずその直接の個々の微々たる被害者であった入学者に対して、また、何等の説得もしていなかったところに、悲劇が生れたわけであったと思います」

「エメボイ実習場史」の内容は、第一編「実習場構想と移民」、第二編「その人物・その施設・その教育」、第三編「自然環境と場内生活」、第四編「実習場出身者の足跡」。

少年少女訪日使節団が帰国

日本語普及センターは九三年度分野別講座第三半期の受講生を募集している。テーマは「補助動詞」（その二）。九月から十一月まで十二回。

講師は太田享基金派遣日本語教育専門家。授業料三十ドル相当。申込み照会はセンター（電話570・6513）へ。

風

きのう、サントス港に練習艦隊を出迎えた人たちの中に足腰の不自由な高齢の女性がいた。富山県出身の星野良江さん、八十六歳。それを知った艦隊員の一人が、星野さんを背負って、タラップを登り、船内を案内。星野さんは、孫のぬくもりを感じたことだろう。ブラジルでは絶対といっていいほど愛される練習艦隊。そのわけの一端がこのへんに。

☆

牛肉の小売値が一週間のうちに二五％も上がった。四十七日間に一三五・六％も上がっていたのである。値上がりの主な原因は、畜産家が、地方の雨不足のため肥牛を売り惜しみしていたこと、牧場には痩牛ばかりだったからである。現金での卸売値は、今週に入って今年最高のアローバ（十五㌔）一千五百クルゼイロ（ヘハネ上がった。本年度の国内での牛肉供給量は四百十万㌧と昨年より一三％多いが、庶民には身近な食品とは縁遠いものになりそうだ。

☆

水の浄化研究の大家として名高い小島貞男農学博士が、夫人信子さん同伴で奈良県人会の招聘で、十七日、来聖した。小島博士は衛生工学部門技術士として、日本の有名な五十以上の湖水浄化を手がけて、成果を収めている。多彩なキャリアを持つ人で、ブラジルは三度目、ブラジリアの湖水浄化設計、サンカルロス大学での学術会議で浄化実験談を披露している。

☆

市内ジャルジン区やモエマ区方面のアパートを専門に荒らし回って少なくとも八十件以上の盗みを働いたギャング団の首領ロジェリオ・L・モデスト（二二）が、十七日、第二警察署の刑事達によって再逮捕された。この男は、八九年ごろからアパートを専門に襲って、同年末、未決入りしていたが、仲間と共に脱獄した。盗みに当たって、女や子供を人質とし、着ている物にアルコールをかけて火をつけると脅し、金庫や有り金を被害者から引き出す手段としていた。

NHK学園
投句呼びかけ

NHK学園全国俳句大会、短歌大会が投句投稿を呼びかけている。

俳句は、未発表の二句一組を、短歌も未発表二首一組を、二百字詰原稿用紙、または便箋に書いて送ればよい。ジュニアの部は一句、一首。

作品の応募締切りは、九月二十日、送り先は、日本の郵便番号186－01、東京都国立市富士見台2－36、NHK学園「全国俳句大会」、「全国短歌大会」へ。応募の封筒に「海外」と書き添える。

大会は、十一月二十七日「短歌」、二十八日に「俳句」。

日野町から使節団
エンブーの芸術祭に

滋賀県日野町から「エ・一氏（獣医師）、園城清ンブー芸術祭参加親善使節団の一行六人が、去る十一日来伯、滞聖中。

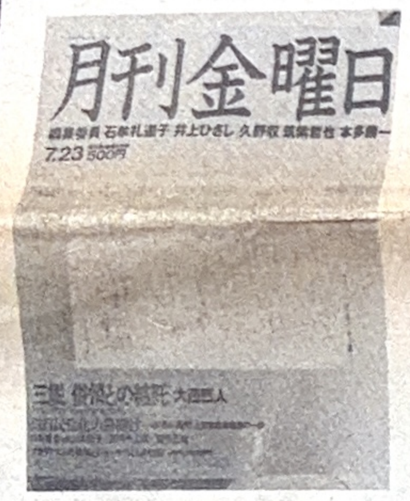
日野町とエンブーは、姉妹都市関係にあり、これまで、十年間に七回、日野町から友好使節団が来伯している。今回は、民間人が主体。

一行は、島田敬三氏（日野町教育委員）、岡藤芸術祭への参加③エンブー市民権受証②エンブー市名誉

彦氏、奥村俊治氏、岡田弥一・日野町の今後友好事業の話し合い――。

島田氏らは、十五日まで公式日程をこなし、十九日、離聖する。（写真は日野町の使節団とエンブー市の姉妹都市事業関係者）

『月刊金曜日』を発行
本多勝一、井上ひさし氏ら



創刊された『月刊金曜日』

「この『癒着あるいは独裁化』を監視して未然に防ぐための最も有効な働きを示してきたのがジャーナリズムです。腐敗しつつある権力は、国民に『知られる』ことをまず最も恐れます」（創刊のことば）。

政治の腐敗に新聞は何をしていたのか。新しいジャーナリズムを創る、と本多勝一元朝日新聞編集委員、筑紫哲也（ニュース司会者）、石牟礼道子、井上ひさし、久野収の四人が編集委員となって七月二十三日、『月刊金曜日』（株式会社金曜日発行）の創刊号が発刊された。

特集は「総自民党化の幕開け―衆愚が選択した日本政治自壊の一歩」。故・尾崎行雄の三女、相馬雪香と三木睦子・故三木首相夫人の対談では「日本の封建制というものを根本的に直して、世界に通用する日本人にならなければだめです」「政治はきれいでなければいけないという教育をしていないから、政治家に正直を望むのは八百屋で魚を買うようなものだなんていうことを言わせて平気でいるんでしょう」と手厳しい。国弘正雄・参議院議員のインタビューでは、「新生党はいわば元自民党田中角栄部屋。日本新党は自民党予備軍だ」「これでは大政翼賛会だ」と選挙結果にふれ「マスコミは日本民族の一里塚を超えさせる点で決定的な間違いをした」と選挙報道を批判する。

『月刊金曜日』は広告主に左右される経営を避けるため、収入の基本を読者の購読料においている。これは「自民党単独政権下の政界史は、そのまま実力者と新聞記者の癒着の歴史でもある」、「文芸春秋五月号」政治記者は何をしたか―石川明夫・新聞記者）との自戒の文にもあるように、マスコミのあるべき姿を追求するからだという。

編集委員の一人、井上ひさし氏は「すなわち新聞の立場というものが、事実や真実をなにほどか加工していることがよくわかる。では、定義してから見るのではなく、見てから定義するというジューナリズムは実現不可能なのであろうか。それは大変な難事業だが、とにかくやってみるしかないだろう」とトビラに書いている。

「月刊金曜日」は十一月より週刊化する。問い合わせは（株）金曜日まで。東京都千代田区神田錦町2の2　鈴座第一ビル五階。電話〇三－三二九六－〇〇八一。

「茶の道」の移動展
最終回はクリチーバで

クリチーバ市制三百年の記念行事の一環として「TEA ROAD」（茶の道）移動最終展が、九月十日、十一日、クリチーバ市のAABBサロンで行われる。一昨年のサンパウロ、昨年のリオに続いて三度目。

共催は、裏千家ブラジルセンター、AABB（伯銀）、クリチーバ市制三百年事業委員会。

移動最終展の主な催しは、「茶の道」に関する展示会、抹茶デモンストラション、点心。百種類以上の「茶」が展示される一方、「茶の道」の関連でウクライナ、ポーランド、パキスタンなどのコロニア関係者の協賛参加がある。主催者は二日間で一千人以上の入場を見込んでいる。サンパウロおよび近郊の町からの参加者も募集中。照会は裏千家センターへ。

展示会の〝軸〟になっているクリチーバの岩上輝子さんは、十七日「総合茶会ということです。伯銀の施設でやります。サンパウロからもツアーが出ます。ぜひ参加を」と呼びかけていた。

協賛はクリチーバ総領事館、クリチーバ市役所、同観光局、クリチーバ文化財団、クリチーバ文援協、留学生OB会、日系クラブ、パラナ文化連合会、日伯商工会議所など。

在日外国人の子供に
日本語テキスト

〔時事〕外国人労働者の流入で、日本語が十分理解できない子供たちが増えているため、文部省は十七日、日本語の指導教材を作成した。昨年に続き二冊目で、イラストやクイズ形式を盛り込み楽しみながら学習できるよう工夫している。

教材は「日本語を学ぼう2」と題し、A4判百十六ページ。「空気でっぽう」「町で働くひとびと」など三十六課に分かれ、小学校一年―四年で学習する社会、算数、理科を扱っている。日本語の文型練習コーナーも各課で載せた。

「草花をそだてよう」では、ヒマワリの生長過程をイラストで示し、日本語の説明文と結びつける設問も。読解力と観察力を同時に養うようになっている。

同省によると、日本語が十分理解できない外国人の児童・生徒は約五千五百人。教材はこうした子供たちが在籍する全国の約二千校に配布されるほか、一部一千百円で市販される。また、同省は来年度以降、小学校高学年、中学校の学習程度を盛り込んだ日本語教材を作成する考え。

グランデABC陸上競技

第九回グランデABC陸上競技大会が、八月二十九日午前八時から、サント・アンドレ市のアルマンド・アルーダ・ペレイラ広場一〇〇（SESI）で行われる。

グランデABC日伯連合会の主催、六団体が参加する。

08月 17日	1クォッタ当り価格
ンドン（金融投資信託）	CR$ 29,2374766
定利子付きフンド	CR$ 13,0688343
定利子（インターバンク）付フンド	CR$ 11,2441464
式投資フンド	CR$ 21,4818021
品投資フンド	CR$ 16,2324541
品ポートフォリオフンド	CR$ 12,3511673
ンド・ミスト	CR$ 9,2242529
南米銀行	(011) 288-0033

浪人市場

恋慕江い

いや、そいつらはこれからつかまえてやる。それより、こっちは大川という大物をつかまえるほうが先なんだ」

「おかしゅうございますね。悪浪人たちがつかまらないのに、笠間さんはだれからあたしが空き家へかつぎこまれたのをお聞きになったんでしょう」

「はだか長屋のくず十というやつが知らせてくれたんだ」

「まあ、憎らしい。本当は、そのくず十というやつがあたしをだまして、こんな目にあわせたんです。笠間のだんな、あたしのいうことを一通り聞いていただけますか」

お杉は開きなおらずにはいられない。

「よし、聞いてやろう。どんな話でも一通り聞いてやるのは八丁堀の役目だ」

笠間は冷たい顔にちらっと薄らわらいを浮かべる。

「さっき、くず十はわざわざ大川さんが戸村さんの前の柳原土手で待っていると知らせてくれたもんですから、あたしはだまされるとは知らず、金を五十両持って、路地づたいにいそいで細川さまの横町へ出ました。すると、くず十が浪人者たち二人を雇って、そこに待ち伏せしていて、いきなりあたしを縛りあげ、あの空き家へかつぎこんでしまったんです。そこでくず十は浪人に五両ずつやって、もう引き取ってくれといいましたが、浪人たちはあたしをかつぎあげた時、帯の間に五十両入れてあるのを探っていて、山下浪人のほうがふいにくず十をしめ落としてしまい、五十両を大森と二人で山わけにした上、どうせこの女は佐原屋のおもちゃにされる体なんだから、ついでに二人でいたずらをしていこうと、大森をさそったんです。けど、大森のほうは、[illegible]と、一人で先に出ていきました。後に残った山下が、こいつもじゃまだからと、そこに気を失っているくず十のえりがみをつかんで、次の間へ引きずっていこうとふすまをあけたとたん、大川さんが当て身で倒して出てきてくれました。大川さんはまずいそいでくず十に活を入れてやり、やっと息を吹きかえしたんで、こんどは山下の両手を縛ってこれにも活を入れ、それからあたしを助けてくれたんです」

「そうか。そりゃあとんだ災難だったが、そのお前を助けて家まで送ってくれた大川忠介は、いまどこにいるんだね。たしかにこの家にいるんだろう」

笠間はあくまでも冷たい顔つきでそんな皮肉な突っこみ方をする。

「笠間のだんな、悪いのは佐原屋とくず十、山下浪人と大森浪人の四人のほうじゃないんですか。どうして早くこの四人をつかまえていただけないんでしょう」

「そんな指図はお前にうけなくても、いまの話が本当なら、後でよく調べて、お公儀にゃちゃんと目がある。それより、今夜のおれは、おたずね者の大川忠介をつかまえるほうが先なんだ」

「ようございます。では、もうおたのみいたしません。どうぞお引き取りくださいまし」

お杉は腹立ちまぎれについ底意地の悪い顔を露骨にしてしまった。

「なんだと――」

「どういうわけか存じませんが、この間うちからおたずね者にされている大川さんが、今夜この町内にこんな手くばりがあるとわかっていて、のめのめとあたしの家まで送ってくるはずはございませんでしょう。たとえ送ってやると大川さんが親切でいってくれても、あたしのほうでとめます。これだけは笠間のだんなのお見込み違いでございます」

(185)